読書の価値 ⑵

一般に、アイデアが豊かな人というのは、なにごとにも興味を示す、好奇心旺盛な人であることが多い。これは、日頃からインプットに積極的だということだ。ただ、だからといって、本を沢山読んでいれば新しい発想が湧いてくるのか、というとどうもそれほど簡単ではない。おそらく、それくらいのことは、ある程度長く人生を歩んできた人ならご存じだろう。

いずれにしても、いつでも検索できるのだからと頭の中に入れずにいる人は、このような発想をしない。やはり、自分の知識、あるいはその知識から自身が構築した理屈、といったものがあって、初めて生まれてくるものだ。そういう意味では、頭の中に入れてやることは意味がある。テストに出るからとか、知識を人に語れるからとか、そういった理由以上に、①頭の中に入った知識は、重要な人間の能力の一つとなるのである。

また、発想というのは、連想から生まれることが多い。これは、直接的な関連ではなく、なんとなく似ているものなどから引き出される。現在受けた刺激に対して、「なにか似たようなものがあったな」といった具合に※リンクが引き出される。人間の頭脳には、これがかなり頻繁にあるのではないか、と僕は感じている。

「これと同じことがどこかであったな」と思いつく、いわゆる※デジャヴも同じである。思いついたときには、言葉になっていない。なっていないから、「なんとなく……」と思いつく。思いついたとわかるのに、何を思いついたのか、なかなか引き出せない。それは、視覚的な情景だったり、もっと別の感覚（たとえば嗅覚）であったりする。ただ似ているというだけで、「そうそう、あのときと同じ」で終わってしまうこともある。むしろその方が多い。あるいは、考えても考えても、どうしても思い出せないこと、つまり、思いつきを逃してしまうこともある。夢を思い出せないみたいに、たしかに一度は自分の頭に浮かび上がったのに、煙のように消えてしまうのだ。

しかし、ときには「もしかしたら、あれが使えるのではないか」となったり、「これは、あれとなにか関係があるのでは」となったりして、そこから考えていった結果、新しいアイデアに辿り着けることがある。思いついただけでは、ただのアイデアであり、使いものになるかどうかは、実際に試してみたり、もう少し調べてみたり、あるいは正しいかどうか計算してみたりしないとわからない。それらの確認が、自分ではできないこともある。使えるかどうかも、やはり知識がないと判断できない。でも、②この段階では、他者に協力を求めることも、コンピュータを利用することもできる。

（森博嗣『読書の価値』ＮＨＫ出版 による）

※リンク…結びつけられたこと。関連すること。
デジャヴ…それまで一度も経験したことがないのに、かつて経験したことがあるかのように感じること。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「頭の中に入った知識は、重要な人間の能力の一つとなる」とあるが、筆者はなぜこのように述べているのか。適当なものを選びなさい。

ア 本を沢山読むようにすることで、好奇心旺盛な人になることができるから。

イ 頭の中に知識があってこそ、新しい発想が生まれてくるようになるから。

ウ テストや会話などで知識を外に出すためには、まずは頭の中に入れる必要があるから。

(2) ——線②「この段階」とはどのような段階か。適当なものを選びなさい。

ア 沢山の知識をインプットしている段階。

イ 新しいアイデアを考えている段階。

ウ 刺激に対するリンクが引き出される段階。

エ 思いついたアイデアを検証する段階。

(3) 「連想」について本文の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア 現在受けた刺激に直接的な関連がないものは、なにか似たようなことがあったと感じても思い出すことはできない。

イ なにか似たようなことがあったと感じても、ただ似ていることを思い出すだけで終わってしまうことも多い。

ウ 現在受けた刺激に対して似たようなことを連想し、そこから考えを進めて新しいアイデアに辿り着けることがある。

エ なにか似たようなことを連想し、それをきっかけに思いついたアイデアは、使いものになることが多い。